



ぶっちゃけインタビュー 6
大友良英さん(おおもよしひで)
音楽家

自由から
フェアへ

大友さんは、日本では数少ない「即興音楽」の演奏家。三〇代はヨーロッパを中心に活動してきた。九年前から、障害のある子どもたちとも即興演奏の活動を始めた。東日本大震災をきっかけに、故郷・福島で「プロジェクトFUKUSHIMA」(※1)を立ち上げ、コンサートで元気づける。昨年、「あまちゃんバンド」(※2)で世の中を湧き立たせた。多彩な活動のどれも、これも、一つの根っこでつながっていた。やっと、大友さんが一人になった。(あれ、これも間違いかも。やっぱり、一人の人も一つじゃないかも。)

「違い」を受け入れようよ、
誰もが「違う」んだから

—名古屋のちくさ正文館書店さんで、『コトノネ』を扱っていただいています。店長にご挨拶に伺ったんです。そのとき、大友さんのことを聞いて、著書『MUSICS』(※3)も勧められて…。

ああ、古田さん(※4)ね。筋金入りの本好きで、最高の知識人ですよ。商売もうまいんだ(笑)。

—それで、大友さんは、障害者の人と関わって音楽活動をされている、と教えていただいたんです。

神戸の「音遊びの会」(※5)ですよ。障害者と関わっているっていうのとちよっと違うけど…。

—ああ、僕、いきなり踏んでしまいました？(笑)

いやいや、言い方なんですけど、結構大切なことで…。それ「健常者」と関わっていらっしやいますよね、って言われるの、いつしよじゃないですか。俺なるべく固有名詞でいきたいんですよ。アメリカ人とかじゃなくて、アメリカの誰々さんとか、どここのグループと関わっているというなら言える。で、障害者と関わってるんじゃないって「音遊びの会」っていう障害者のいるグループというしよに活動して、九年くらいになりますね。

—障害者でも、何だっつて、一つにくくるな、と「言う」ことですね。

僕は、福島の出身ですから、東日本

大震災以降、海外に行くと「福島の方は、いまだどう思っているのですか」って聞かれるんです。でも、答えようがない。僕は、こう思います、とか、僕が知っている人は、とかしか言えない。僕は、福島や日本を、代表しているわけでもないし…。

一つになるって、怖いよね

—福島の被災地だっつて、思いは一つじゃない。

バラバラですよ。だから、一つにするよ。うな考え方は止めた方がいい。見方を含めてね。

一つになろう、絆ってキャンペーンがあるけど、本音と建前を許さない感じがあつて苦手だな。人間ってそんな立派

(※1)「プロジェクトFUKUSHIMA」

東日本大震災後の福島から「いまの福島」と「未来の福島」の姿を全世界に向けて発信しようとするプロジェクト。福島出身／在住の大友良英(音楽家)、遠藤ミチロウ(音楽家)、和合亮一(詩人)の三名を代表とし、県内外から集まった有志によって二〇一一年五月に立ち上げられた。同年八月一五日に福島市内で約一万人が来場した「フェスティバルFUKUSHIMA」を開催するなど、さまざまな活動を行っている。

(※2)「あまちゃんバンド」
大友良英が音楽を担当した、NHK連続テレビ小説「あまちゃん」(二〇一三年上半期放映)のレコーディング参加ミュージシャンで構成された、スペシャルビッグバンド。

(※3)『MUSICS』
二〇〇八年六月、若波書店刊。一つの響きから未知のアンサンブルへ。ジャズ、ノイズ、うた、映画音楽―多様な場で音楽を発動する大友良英の話し言葉と書き言葉による複数の思考。

